



芸劇eyes番外編 vol.3

もしもし、こちら弱い派 —かそけき声を聴くために—

弱さを肯定する社会へ、演劇からの応答

Geigeki eyes extra edition vol.3 Hello, we are “YOWAI-HA”

社会の変化を映し、演劇をアップデートする3劇団を一気に紹介

確かな原石をショーケース形式で紹介する「芸劇eyes番外編」、8年ぶりに開催。タイトル「もしもし、こちら弱い派—かそけき声を聴くために—」が意味するものは——。

注目すべき才能を広く紹介する「芸劇eyes」よりさらに若手の、けれども無視できない資質と表現力を持つつくり手をショーケース形式で紹介する「芸劇eyes番外編」。2011年の「20年安泰。」ではジエン社、バナナ学園純情乙女組、範宙遊泳、マームとジブシー、ロ口の5組を、2013年の「God save the Queen」ではうさぎストライブ、タカハ劇団、鳥公園、ワウフラミンゴ、Qと、現在、めざましく活躍する団体をいち早く紹介してきた。

この第3弾を7月22日～25日に開催する。前回から8年という長い時間が空いたのには「芸劇eyes番外編」の性格が大きく関係している。「番外編」は、未来の演劇界の財産を先取りする企画ではなく、ある流れが演劇界に生まれたタイミングで実施しているからだ。開催当時にそれぞれ発表しているのここで詳しく説明はしないが、「20年安泰。」はネットネイティブ世代の演劇界への到来、「God save the Queen」はそれまでと異なる意識を持った女性演劇作家の台頭が理由だった。

今回の「もしもし、こちら弱い派—かそけき声を聴くために—」は、この数年、主に30代以下のつくり手に見られる傾向である“弱さの肯定”から生まれた。“弱さ”は、聞く人によってイメージの幅がある単語だが、ここでは“おざなりにされてきた立場”と考える。

日本は長らく——朝鮮特需、高度経済成長期、バブル時代と——右肩上がりの経済状況が続き、それに伴う形で“早く、強く、大量に、遠

くまで”という価値観が奨励されてきた。それが’90年代初頭のバブル崩壊、’95年の阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件、’11年の東日本大震災などが起き、かつての物差しでは立ち行かないことが、社会にも個人の内面にも次々と噴出している。ただしそれは悪い側面ばかりではなく、合理主義や多数派による支配といった当然とされてきた前提を疑い、既得権益を見直そうという動きにもなっている。実はこれは世界で同時多発的に起きていて、アメリカのMe Too運動やBlack Lives Matterはそのわかりやすい事例だろう。

芸術は坑道のカナリアとよく言われるが、演劇、特に小劇場演劇は、つくり手が若く、創作のフットワークが軽い分、社会の変化をいち早く内在化して表現する。“早く、強く、大量に、遠くまで”から相反する場所で生きる人々の繊細な声を反映させた作品が、この数年、それぞれの作家の個性のもとに生まれ、広がっている。それを「弱い派」と名付け、「芸劇eyes番外編 vol.3」には3つの団体を選んだ。

まず、いいへんじは女性4人の劇団で全員が20代。中島梓織が作・演出する物語は、その若さに似合う瑞々しい言葉が登場人物の間を明



宣伝美術：一野篤 イラストレーション：平山昌尚

るく行き来するが、出発地点には大きな諦念が感じられる。いわば、いかに絶望を乗り越えて生きるかという20代のリアルがある。ウンゲツィーフアの作品には非正規雇用者が多く登場するが、作・演出の本橋龍はそのシステムを生み出した社会を直接的には糾弾せず、たくましくもある生きる彼らの生態を淡々と描く。そして関西から参加するコトリ会議は、脱力系SFという世界観の中で、上手に死なない人とその人に巻き込まれる人々を描き、うまく生きられないことの重力を少しだけ軽くする。

社会のさまざまな価値観が“ゆっくり、丁寧に、少しずつでも”を基準にアップデートされつつある今、演劇からのその応答に、ぜひ耳を澄ませてほしい。上演時間は1劇団30～40分で、1公演で3劇団すべてが観られる。

文：徳永京子（演劇ジャーナリスト）



いいへんじ「過眠」(2018)

ウンゲツィーフア | <https://ungeziefer.site/>

2013年前身となる「栗☆兎ズ」結成後、2017年「ウンゲツィーフア」に改名。劇作家「本橋龍」を中心とした人間関係からなる実体のない集まり。創作の特徴はリアリティのある日常描写と意識下にある幻象を、演劇であることを俯瞰した表現でシームレスに行き来することで独自の生々しさと煌めきを孕んだ「青年（ヤング）童話」として仕立てること。



© 本橋龍



ウンゲツィーフア「自ら慰めて」(2018)



コトリ会議「セミの空の空」(2019)

コトリ会議 | <http://kotorikaigi.com/>

2007年結成。劇団の中核となる作家・山本正典は近未来を想起させるSF感あふれる壮大な設定の中に、現代社会における“ふつうの人”の持つ気持ちを反映させた物語を創作。その作品でもちいる言葉は、軽妙で笑えるが、詩情に満ちて切なくも響く。そして発話するテンポとボリュームを操り声や音を聴かせる演出を得意とする。2016年におこなった地方3劇団協働の「対ゲキツアー」以降、単独ツアー公演をおもにした本公演と、イベント的な小規模公演、演劇祭では誰も狙わない“隙き間”を利用した神出鬼没な小作品を、規模によって変幻自在に上演している。



7月22日(木)～7月25日(日) シアターイースト 詳細はP8へ

いいへんじ 「薬をもらいにいく薬(序章)」

作・演出：中島梓織
出演：飯尾朋花、小澤南穂子(以上、いいへんじ)
遠藤雄斗、小見朋生(譜面絵画)、タナカエミ
声の出演：松浦みる(いいへんじ)、野木青依
音楽：野木青依、Vegetable Record

ウンゲツィーフア 「Uber Boy(仮)」

作・演出・出演：池田亮(ゆうめい)、金内健樹(盛夏火)
金子鈴幸(コンブソンス)
黒澤多生(青年団)、中澤陽
本橋龍(ウンゲツィーフア)
音楽：額田大志(ヌトミック/東京塩麹)

コトリ会議 「おみかんの明かり」

作・演出：山本正典
出演：牛嶋千佳、三ヶ日晩、原竹志
まえかつと(以上、コトリ会議)
音源制作：佐藤武紀
協力：兵庫県立ピッコロ劇団 ※五十音順

企画コーディネーター：徳永京子